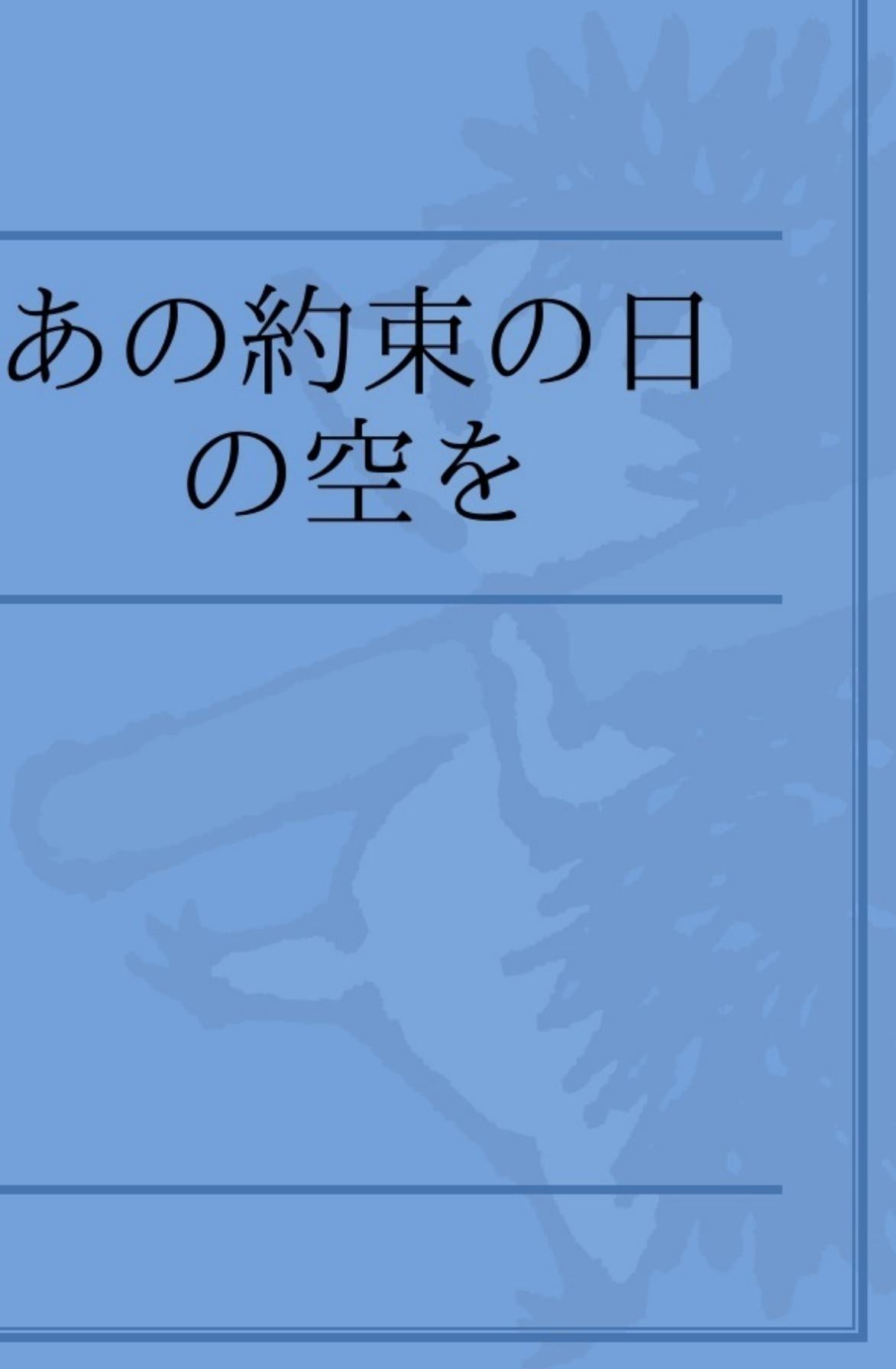




あの約束の日 の空を



ランヴェルトが近衛騎士団長という役職を得たのはさまざまな幸運の積み重なりに他ならない。
そもそも彼は平民の出だった。それではただの騎士にはなれても近衛にはなれない。
剣の腕を買われて貴族の養子となったのが騎士見習いだった十五の時。悪い話ではなかった。
彼は次男だったし、彼の姉とふたりの妹を嫁がせるための持参金が両親の悩みの種だったのだから。

売られてきたようなものだと、ひとは言う。

跡継ぎがいなかった貴族の家に、うまく取り入れた恥知らずだ、とも。

それら陰口を気にしたことなどなかった。何より近衛騎士という立場にも己の剣にも誇りを持っていた。

見習いの頃からの気働きと、そうした泰然とした態度が先代の団長に気に入られ、可愛がられた。

それでも貴族の暮らしは、ランヴェルトには馴染めない部分が多い。豪華な食事も着飾った貴婦人たちも過剰に派手派手しく感じられてうんざりする。

養父母の顔を立てて、華々しい席も出来る限りは付き合うのだが、ときおり人目を盗んで下町を歩くことをランヴェルトは楽しみにしていた。

守られるより守るのが仕事の騎士ではあるが、団長ともなると従者やら見習いやらがいつも傍に仕えている。彼らには彼らの役目があり、それはありがたいこともあるのだが、たまには放っておいてもらいたいのが本音だ。

最近では副団長のグロードが、団長のひとり歩きを阻止するよう、従者たちに命じているらしい。しかしランヴェルトはそれを振り切って簡単に街へ紛れてしまう。元が平民であるからか、騎士団ひとつを預かる身となった今でも、城下の人々に混じってしまうと不思議なくらい違和感がない。

ランヴェルトはその日もひとりで息抜きをしていた。

大通りから少し奥まったところにある、〈青鹿亭〉という店が彼の行きつけだった。繁盛しているとは言い難く、女気もない酒場だ。まだ昼間であったから客はまばらだった。そのことが普段他人に囲まれている身にはありがたい。

職業柄か、酔うほど酒を飲むことなどまずないのだが、この店は豆の煮込みが気に入っていた。

ほとんど肉の入らない、素朴なだけの煮込みだが、質素な料理に飢えているランヴェルトには実に旨く感じられたし懐かしくもあった。どこか実母の味に似ているのかもしれない。現在暮らしている屋敷では、同じような物を作ってくれと頼むことさえはばかれる。

煮込みを食べ、酒ではなく茶を飲んで、ランヴェルトは店をあとにした。

養父母の屋敷へ帰る前に騎士団の宿舎へ寄ることにして、大通りから広場へと出た。建国に尽力したという偉人の像を見るときもなしに見て広場を横切り、石畳を歩いていく。

道を曲がって広場が見えなくなった時だった。

「ランヴェルト……！ 騎士、ランヴェルト、様！」

従者に見つかったかと思い、それにしても呼びかけがおかしいと考えながら振り返ると、そこにいたのは杖を手にした魔術師だった。フードを目深に被っているため顔ははっきりとしないが、まだ若い男であるらしい。

「誰だ？」

ランヴェルトが短く問うと、魔術師はフードをはねのけた。淡い色の髪がこぼれる。青い目をしていて、やつれたような、ひどく痩せた顔。

「私を、お忘れか」

きつく怨みのこもった視線に睨まれた。そのこけた頬に、つやのない髪に、病的に白い肌に、どこか見覚えがあったらうかと、ランヴェルトは思考をめぐらせる。

思い出せずにいる様子に、魔術師が激昂した。

「やはり！ やはりあなたは覚えていないのだ！ 子供の約束と軽んじて！ 私が……私がどれほどっ」

「ま、待て。落ち着いて……」

「うるさい！ お前の言うことなどもう耳を貸すものか！ お前が子供だった私を騙したのだ！ 夢のようなことを言って！ ジャテ村で土を耕す両親が、どんな思いで私に魔術を学ばせてくれたか。そんなことなどお前には、恵まれたお前にはわからないのだから！」

ジャテ村。その単語がランヴェルトの脳裏に引っかかった。聞いたことが……いや、行ったことがある。

隣国へ招かれた王子の護衛で国境へ付き添った時。あの頃のランヴェルトは団長ではなく副団長だったが、道中で立ち寄った場所のひとつがジャテ村だったはず。

大きな村ではなかったが、豊かな土地があった。穏やかに流れる川と広がる麦畑。美しい景色だった。

農村に王子殿下がお泊りということで多少なり騒ぎになり、浮き足立つ村人をなだめるためにランヴェルトたち護衛の騎士があれこれと手を焼いたことを思い出す。

そう、確かその時に。

見習い魔術師の少年がひとり……いなかったか。

「まさか……きみはあの時の。ジャテ村の、ステフェン……なのか」

血色の良い顔にはにかんだ笑みを浮かべていた少年と、目の前のすきんだ様子の魔術師とがつつながら、信じられないという思いにランヴェルトの声はわずかに震えた。

「どうして……何があったんだ、ステフェン」

「何があったか、だと？ お前が、お前がそれを訊くのか、お前がっ！」

髪を振り乱して魔術師が叫ぶ。

「落ち着いてくれ。事情があるなら聞く。困っているのなら俺が力になるから……」

「黙れ！」

一声吼えて、魔術師の顔が、ずっと冷ややかなものになった。

「それがあなたのやり方か。出来もしない約束ばかりするのが」

「……なんのことだ？」

「あなたが……お前が、言ったんだ！ 宮廷魔術師になれると！ いつか迎えに来ると！」

記憶がどっと押し寄せてきて、ランヴェルトは血の気が引くのを感じた。

確かにそのようなことを言った……村人を落ち着かせるという仕事を手伝ってくれたステフェンの利発さをほめて、彼の母親に微笑みかけ、息子さんは立派だ、将来有望だ、と……。

ならば。

その言葉を信じた結果、ステフェンが挫折を味わい、こうなってしまったのなら。

今のこの状況は、俺のせいだ。

あの明るい少年を、怨みの塊のような今の姿にしてしまったのは、他ならない、俺だ。

「お前が言ったことを母は鵜呑みにした！ 私も信じていたんだ！ 村から離れ魔術学校へ入るために、その学費の工面のために、両親は畑を売った！ 家畜もだ！ それまで対等だった隣人に雇われて働く惨めさがお前にわかるか」

「わかる」

ランヴェルトは即答した。裕福とは言い難い家に生まれた彼である。農民でこそなかったし、父が他人に雇われる職人だったことを惨めとは思わなかったが、それでも農家が畑を失って小作となるのがどういうことかはわかるつもりだった。

「わかるよ。……それは、俺のせいなんだな。俺が余計なことを言ったからなんだな？ すまない……本当にすまなかった」

深々と頭を下げた。王子相手にもここまではするまいというほど心をこめた。

しかしランヴェルトのその態度は、かえってステフェンの気に障ったらしい。

「今更なにを殊勝な！」

貴族に身を売った痴れ者が、と吐き捨てる。魔術師のローブをひるがえして杖を構える。

「ステフェン？」

「ふん、人気のない道に来たのがお前の不運だ」

確かに気がつけばふたりきりになっていた。広場からは離れ、騎士たちが暮らす宿舎もまだ遠い。

魔術師の青い目には、怨みでもなく冷ややかな暗い光でもなく、今や明らかな殺意があった。「よせ……！」

ランヴェルトの制止は間に合わない。もとより何を言っても聞いてはくれないだろう。

魔術師が小声で何かを唱え、杖が微かに輝いた。

危機を感じながらも剣を抜くことがどうしても出来ずに、ランヴェルトは大きく後ろへ跳んだ。

が。

彼の着地を狙ったかのように。

石畳がひび割れ崩れてたちまち下半身の自由を奪われていた。

穴に落ちたのではない。蔦のような黒っぽい何かが地面から伸びて腰まで絡みついている。

その蔦は騎士団長の剣も取り込んでしまっていた。

ランヴェルトにもはや武器はなく。その場から動くことも……叶わない。

「いい格好だな、団長どの」

「ステフェン……」

「命乞いでもしてみるか？ 泣いて許しを乞うか？ この国で知らぬ者のいない騎士様が、私のような、無様に擦り切れた魔術師の前に這い蹲るか」

「もうよせ。こんなことをして何になる？ 俺を殺してもきみの罪になるだけだ」

「少なくとも、それで私の気は晴れるだろうさ」

残虐に笑って、魔術師は杖をかかげた。

小さく唱えられた呪文に応じて、きらきらと輝く氷の刃が形作られていく。

今のランヴェルトは動かない案山子同然だから、冷たい刃はやすやすと彼の命を奪うだろう。

「やめろ！！」

あたりに響く大声でランヴェルトが怒鳴った。

「駄目だ！ やめてくれ！！」

「見苦しいことだ」

魔術師が失笑する。しかしランヴェルトは更に声を張り上げた。

「やめてくれ、グラード！」

魔術師が大きく目を見開いた。

その胸に。

赤黒い花が咲くように。

血が。

そして、剣の切っ先が。

ランヴェルトの体が大きく傾いだ。足を固めていた蔦が消えてゆく。

形成途中の氷の塊が石畳に落ちて砕けて消えた。

「ステフェン！」

転びそうになりながら駆け寄って、崩れ落ちる魔術師の体を抱える。

その背後に見えたものは、見えていたものは、己の剣を投じた忠実な副団長の姿だった。

「大丈夫ですか、団長！ だからひとり歩きは控えてくださいと……！」

走ってきたグラードを感謝で迎えることは、ランヴェルトには出来なかった。

絶えようとする命を支えて、どんなに今更でも間に合わなくとも、どうか伝わってくれと何度も詫びる。

「すまない。本当にすまない。きみを迎えに行けばよかった」

本当に宮廷魔術師になれたかどうか、それは騎士であるランヴェルトにはわからない。それでも紹介くらいはしてやれたはずなのだ。

「せめて会いに行くべきだった。許してくれなんて言う資格もない。こんなことになって、すまない……」

青い目はもう焦点が合っていない。かろうじて浅く息をしてはいるが、長くは持たないことは明らかだった。

魔術師の口元が微かに動き、何か言葉があるのなら聞き漏らすまいとランヴェルトは耳を寄せた。

「ほん……は、わか……あなたが、わる、くは、ない……と」

「何を言う。俺がいけなかったんだ」

ステフェンは微笑もうと、したらしかった。

「あなたは、やさ、し……い。わた、しは……うれしくて。あのと、き……すご、く、うれし、か……た、のに」

あの時というのが、ジャテ村で初めて会った時のことだというのは訊かなくてもわかった。

ほめられて嬉しかったと言うステフェンは、少しだけ、当時の明るい少年の姿に戻ったように見えた。

「ごめ……あやまるのは、わたしの……ただの、さか、うら……みで、こんな」

「もういい。もういいんだ、ステフェン。きみが謝ることなんてない」

ステフェンは今度こそ本当に笑った。

そして、もう、次の声を発することはなかった。

少し離れて様子を見ていたグラードが、おずおずと口を開く。

「もしかして、知り合い、だったんですか？」

「きっときみも会ったことがある。ジャテ村の子だ」

振り向きもせず、低く冷たい声でランヴェルトはそう答えた。

「なぜ殺した」

思わず詰問する口調になった。答えは想像出来ていて。

「殺さなければ、あなたが殺されていたからです」

やはり、想像通りだった。

改めて魔術師の顔を間近に見ると、やつれているのがよくわかった。

金髪がきれいな、頬のふっくらとした少年だったのに、一体どんな苦勞を背負ってここまで来たのだろう。

膝の上にうつ伏せて背中に刺さった剣を抜いてやる。自分の服が汚れることなど、ランヴェルトは気にもかけなかった。それよりも魔術師の体の衰れなほどの軽さに胸が痛む。

まぶたを閉じてやろうともう一度顔を見て、思い出した。

光を失ってしまったけれど。

ステフェンの目はジャテ村の、あの美しい農村の空の色だった。

幼かったあの日の、人懐こい声が聞こえてくる。

『騎士様。ぼく、がんばって勉強します！ だから、だからきっと、迎えに来てくださいね！』

約束ですよ、と言われ。

ああ約束だ、と答えた。

その時も空はステフェンの目の色で。

きっとこの少年の魂が、この色をしているのだろうと考えたりしたものだった。

「約束……したのにな」

忙しかったなんてことは、言い訳にはならない。団長としての任務など、何ほどのものか。

あの約束を交わした日の、ステフェンの目と同じ色の空を。

いつの間に、忘れてしまったのだろう……。

魔術師のまぶたをそっと指で下ろして、ランヴェルトはもう一度だけ胸中で詫びた。